



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	考古学の民族誌：北海道における考古資料の活用と地域との関わりを中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	Gomes, Amanda Suzann
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16557号
Issue Date	2025-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95686
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Amanda_Gomes_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術） 氏名：ゴメス アマンダ スザン

審査委員	主査	教授	加藤博文
	副査	教授	山崎幸治
	副査	講師	卓彦伶
	副査	准教授	岡田真弓（アイヌ共生推進本部）

学位論文題名

考古学の民族誌—北海道における考古資料の活用と地域との関わりを中心に

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、北海道における考古資料の活用方法、それに関わる主体およびその目的を考察するものである。従来、北海道の考古遺産は、日本の中でも独自の地域文化として位置づけられることが多かった。しかしその解釈は、学術的・政治的・植民地主義的な視点の変遷によって大きく左右されてきた。

2000年代以降の考古遺産の保存と活用をめぐる国際的な議論においては、考古学の実践的な活動に留まらず、その管理や運用におけるステークホルダーとの関係性という社会的な分析に焦点を当てた研究が注目を集めている。この種の研究においては、考古資料は単なる過去の人間活動の痕跡としての静的な遺物ではなく、考古学者、文化財の管理者、政策立案者、地域社会との相互作用の中で絶えず変化し、形成され、交渉されるものであるとみなされている。この動きの契機となったのは、2003年に世界考古学会議で開催されたセッション「考古学の民族誌」であり、2005年のその成果が書籍化されることで、その後の動向に大きな影響を及ぼした。これ以降、考古学的知識の生産過程や現代のガバナンス構造の中での解釈および活用の状況を、民族誌的研究手法を用いて検証する研究が世界各地で実践されている。

本研究は、先住民族であるアイヌ民族を含めた多様なステークホルダーを有する北海道をフィールドとして、「考古学の民族誌」の視点から考古資料の管理と活用がどのように実践されているのかについて論じたものである。周知のように2019年にアイヌ民族が日本の先住民族として法的にも明記され、新たに北海道白老町に国立アイヌ民族博物館や国立民族共生公園等が開設されるなど、北海道の歴史と文化を取り巻く社会的環境は大きく変貌を遂げている。そのような中で多様な文化的背景と独自の地域社会を有する北海道の考古資料の管理と活用の現状を文化財の管理者の視点を通して考察した本論文は、極めて独自の着眼点と手法を持った研究であると評価できる。

近年の文化財政策は、保存に力点を置いたものから地域社会を主体とする活用へと、その比重を大きく変化させている。考古資料を含む文化財管理と地域社会の参画に関する議論も幅広い展開を見せている。また日本においては、2010年代に「パブリック・アーケオロジ」の枠組みが紹介され、日本独自の文化的・制度的文脈において考古学と地域社会との連携に関するさまざまな取り組みが実践されているところである。申請者は、本論文において、この「パブリック・アーケオロジ」の取り組みを評価しつつも、さらに考古資料の管理と活用を深く考察し、地域社会の所有権や使用权、過去の意味を問い直す「考古学の民族誌」の理論と視点を北海道の事例に応用することを試みている。考古学を民族誌的手法から考察する取り組みは、日本においても実践例が知られているが、申請者の論文の特徴は、アイヌ民族を含めた多様性に富んだ地域社会を持つ北海道において、この「考古学の民族誌」の実践を試みた点にある。

本論文では、地方自治体の教育委員会や博物館などに勤務する文化財の管理者へのアンケートとインタビューを通じて、北海道の地域社会の持つ文化的特性と複雑さを北海道の歴史的背景と民族

的多様性が影響し、形作っている点を明らかにしている。アイヌ民族のコミュニティとの関係については、その重要性を理解し実践する管理者がいる一方で、十分な協働ができていない実情も明らかにしている。

地方自治体の教育委員会や博物館などに勤務する文化財の管理者の目線を通じて、歴史的・文化的・民族的多様性を持つ北海道の地域社会における考古資料の管理と活用の課題を明らかにしたことは、今後の北海道における考古資料の管理と活用に留まらず、先住民族の文化遺産の保存活用における課題と今後の展望を考える上でも研究上の貢献は大きい。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会では、本論文の独創性と新規性について高い評価がなされた。一方で、（１）分析の対象が文化財の管理者に限られており、アイヌ民族を含む地域コミュニティの声を十分に反映できていないこと、（２）アイヌ民族施策や地域の文化振興施策についての分析が不十分であり、各地域の文化財の管理活用における意思決定プロセスが明確に示されていないこと、（３）先住民文化遺産の特性を踏まえた分析結果の考察がなされていないことなどの不足点が提示された。口頭試問においては、これらの指摘のいずれに対しても、学位申請者から応答及び補足説明があった。その他の疑問点についても、本論文の学術論文としての価値を本質的に損なうものではないと、本委員会では判断した。

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、学位申請者に博士（学術）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。